

史料館の蔵書

—「文庫」を中心に—

学問・研究を志す者にとって書物はどれほど大切なものであろうか。個人の蔵書は一般にその人の趣味や志向、考え方の根本を映し出すといえるが、こと研究者については、その研究への取り組み姿勢や考え方を表すものといえよう。

学習院大学史料館の総蔵書数は、現在、図書、雑誌などあわせて約5万冊あり、そのうち6つの文庫「児玉文庫」、「小川文庫」、「桜鞍会文庫」、「永山文庫」、「学習院考古学文庫」、「橋口文庫」(詳細は4ページ参照)が約2万3千冊を占める。「文庫」とは個人が収集した図書資料をまとめて譲り受け、1つの群として整理し保管しているものであり、収集した人物の関心領域を語ってくれる興味深い学術資料である。

今号では、本館に収蔵されている文庫の中から、特に当館とのゆかりが深い児玉幸多氏(1909~2007)の蔵書であった「児玉文庫」と、このたび大久保家のご厚意により新たに加わることになった大久保利謙氏(1900~95)の蔵書「大久保文庫」を中心に紹介したい。

児玉文庫

学習院大学名誉教授、元学長、児玉幸多氏の蔵書。書籍、目録、報告書、戦前の雑誌類など多岐にわたっている。およそ2万冊の蔵書は、約1万6千冊の書籍と2千冊を超える逐次刊行物からなる。この他に未整理の抜刷(論文の抜粋)や雑誌類が約2千冊ある。氏は平成19年(2007)7月に97歳で亡くなられたが、その生前に、蔵書のすべてを史料館へ寄贈すると決めて下さっていた。

同氏は明治42年(1909)長野県に生まれ、東京帝国大学国史学科卒業後、第七高等学校教授を経て、昭和13年(1938)学習院教授に就任。同45年(1970)に学習院女子短期大学長、同48年(1973)には学習院大学長を歴任。日本近世農村史、交通史の分野の第一人者である。

そもそも学習院大学史料館は、昭和39年(1964)に文学部史学科に発足した史料室であったが、同50年(1975)に大学附置研究機関として独立、その時尽力されたのが児玉氏であった。また第二次大戦中、当時図書館として使用されていた現在の史料館建物に、夜間空襲が飛び火し、それを消し止めたというエピソードもある。こうした経緯から、児玉氏は「史料館の父」と称される存在であり、蔵書のもっともふさわしい寄贈先として当館を選んでいただけたこととなった。

児玉氏は戦前から地方史研究に取り組み、戦後は史料保存・利用運動に力を入れた。地方史研究者の育成や自治体史の編纂にも先導的役割を担い、その関係から当館に寄贈され

た蔵書のうち地方史関係図書は8千冊以上にのぼる。逐次刊行物の中には、氏が発足に関わった地方史研究協議会の会報『地方史研究』が創刊号から、史学会発行の『史学雑誌』も明治43年(1910)以降に発行された号が揃っている。歴史研究の基本文献が網羅されているだけでなく、『アララギ』や『中央公論』といった文学関係の雑誌も多く含まれている。さらに自身の著作である『近世農民生活史』(1957年 吉川弘文館)、『近世交通史の研究』(1986年 筑摩書房)をはじめ、執筆や編纂に携わった中学・高校歴史教科書やくずし字解読には欠かせないロングセラー『くずし字用例辞典』(1980年 近藤出版社)などが含まれる。歴史学に興味を持つ多くの学生や研究者の様々な問題、関心に応えてくれる充実した文庫である。



『地方史研究』創刊号~3号 (1951年3月~11月)



児玉幸多氏 自宅の応接間兼書斎にて 昭和60年(1985)12月8日



地下書庫に並ぶ児玉文庫

『史学雑誌』

大久保文庫

大久保利謙氏は明治33年(1900)東京生まれ。祖父は明治の元勳、大久保利通。学習院初等科から中・高等科を経て、大正11年(1922)京都帝国大学経済学部入学。3年在籍した後、大正15年(1926)東京帝国大学国史学科入学。卒業後『東京帝国大学五十年史』、『貴族院五十年史』などの編纂事業に携わった。昭和24年(1949)、国立国会図書館憲政資料調査を委嘱され、憲政関係のみにとどまらず幕末以降の経済・外交史料などの収集に奔走し、これが今日の国立国会図書館憲政資料室として結実した。昭和28年(1953)名古屋大学教授、同34年(1959)立教大学教授を歴任。また、学習院大学や東京大学でも非常勤講師として教鞭を執った。

研究論考は、政治史・文化史等と広範にわたっているが、特に明治憲法成立史や華族制度史の体系的研究にすぐれた業績を残した。

同氏は生前、父利武氏(米・独に留学後、内務省官僚として活躍)の洋書コレクションや留学時代の受講ノートなどを含め、蔵書2万冊あまりを立教大学に寄贈。現在これらは「大久保利謙文庫」として公開され、明治維新より大正に至る貴重な日本近代史資料として評価されている。このたび史料館に寄贈された蔵書は、氏が亡くなる直前まで手元に残っていた蔵書群であり、長年の研究生活における収蔵図書の中でも選りすぐりのものといえる。

内訳は書籍が約380冊、逐次刊行物が約400冊。自筆原稿も数点含まれている。一点一点の書物をひもとくと、自筆のサインや購入履歴、朱書きの傍線や鉛筆での書きこみ、蔵書印の押捺などが随所に見られる。また、文献の書評や関連記事の切り抜き、出版広告や付箋などといった付属資料のほか、デパートの包装紙を使った手製のブックカバーなども遺されている。



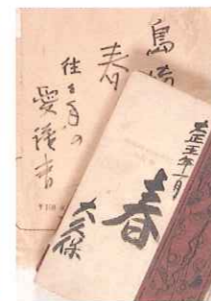
大久保氏自身で記されたタイトルと手製のブックカバー



『日本近代史学事始め』亡くなる3日前に校了となった最後の著書



『白樺』創刊号(1910年4月)から大正期にかけてのもの



『春』と茶封筒 16歳の時の蔵書



『みづのたはこと』昭和60年(1985)11月13日入手 カエデの葉がはさまれていた



『改造』(1921年4月1日号) "Prohibited paper"と書きこみがある

大久保氏最後の著書『日本近代史学事始め』(1996年 岩波書店)は、原資料を追求した先駆的研究に加え、若き日に接した研究者との出会いや、多感な頃に読んだ本、古本屋との付き合いなど興味深い回想が綴られている。例えば『白樺』を読みふける「文学青年」だった氏が、中等科時代初めて買った文学書について、「…神田に東京堂という本屋があって、そこにおそるおそる行った。たしか新潮社から出ていた、きれいな表紙の明治文学の選集があって、そのなかから島崎藤村の『春』を買いました…」と語っている。この時手に入れた『春』は「往々年の愛読書」と手書きした茶封筒に入っていた。想いの深い一冊であったに違いない。

河上肇『近世経済思想史論』(1920年 岩波書店)は、当時京都帝国大学教授であった氏が、大正8年(1919)におこなった6日間にわたる講演をまとめたもの。大久保氏が高等科2年の時に実際にこの講演に参加していたことや、同著愛読の様子が裏見返しに書きこまれている。後に京都帝国大学に進学し、経済学部で河上氏の講義を受けるきっかけとなった一冊かもしれない。晩年93歳の時に購入した徳富蘆花『みづのたはこと』(1913年 新橋堂書店)には、「…はからずキヌタ文庫にて掘り出す。蓋し逸品なり。謙」とある。こうした細かい書きこみや付属資料からは、大久保史学の厚みとともに氏の人となりや素顔にも触れることができる。



大久保利謙氏 立教大学大久保文庫の書架にて 平成4年(1992)10月

個人の蔵書がまとまったかたちで保存され、旧蔵者と関係の深い当館に収蔵されていることの意義は大きい。今となっては手に入らない貴重な書籍も多く含まれている。戦禍を免れ、旧蔵者の没後も蔵書を引き継ぎ、守られたご家族や関係者のご意思を忘れることなく、大学の財産として大切に保存し、各方面の研究のために広く活用されることを願っている。

(図書担当 富田ゆり)